小　学　校

平成 30 年度

教育研究員研究報告書

総合的な学習の時間

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題設定の理由 …… 1

Ⅱ　研究の視点 …… 2

Ⅲ　研究仮説 …… 2

Ⅳ　研究方法 …… 2

Ⅴ　研究内容 …… 3
1　基礎研究 …… 3
(1) 文献研究
(2) 調査研究

2　授業研究 …… 7
(1) 研究主題に迫る手だて
(2) 実践事例

Ⅵ　研究の成果と課題 …… 23
1　研究の成果 …… 23
(1) 教科関連シート「生かシート」の作成
(2) 情報収集方法一覧表の活用
(3) 「表現場面」を繰り返し設定した単元構成
2　今後の課題 …… 24

研究主題

総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力を明確にした授業改善

～教科横断的な学習を支える「生かシート」の作成を通して～

Ⅰ　研究主題設定の理由

現在の我が国は、知識基盤社会の到来や、グローバル化社会、人口減少社会などと言われ、社会が急激に変化し予測することが困難な時代にある。児童・生徒は、このような社会を生き抜き、よりよく社会に参画する力を身に付ける必要がある。

そのような中、平成 30 年６月に文部科学省（以下、「文科省」と表記。）は「Society5.0 に向けた人材育成 ～社会が変わる、学びが変わる～」、経済産業省（以下、「経産省」と表記。）は「『未来の教室』と EdTech 研究会　第１次提言」を公表した。しかし、「文科省」と「経産省」では、学校の基本構造や子供の学びについて見解が異なっている部分がある。「文科省」は「基礎的読解力、数学的思考力などの基盤的な学力や情報活用能力を、すべての児童・生徒が習得できるよう、新学習指導要領の着実な実施が必要である」とし、全ての児童・生徒に一定の能力の習得を求めている。一方で、「経産省」は「一つ一つのコンピテンシーを全てきれいに揃えようとするのは、意図するところではない」という立場をとっている。

しかし、2030 年に向けて「情報活用能力の必要性」や「学びの手段の多様化」という点で両省の考えは一致しており、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について」（平成 28 年 12 月）や「小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編（平成 29 年７月）」（以下、「小学校解説総合編」と表記。）でも重要性が示されている。上記二つの提言において示されている身に付けるべき資質・能力は、総合的な学習の時間で育成する資質・能力とも言える。そのため、総合的な学習の時間において、これからの社会に対応する資質･能力を育成できると考えられる。

一方、「小学校解説総合編」には「総合的な学習の時間を通してどのような資質・能力を育成するのかということや、総合的な学習の時間と各教科等との関連を明らかにするということについては学校により差がある」という課題も示されている。

そこで本研究では、これらの課題を踏まえ、総合的な学習の時間の学習において、これからの社会で必要とされる資質・能力を育成したいと考えた。その実現のため、まず、文献研究により、総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力を具体的に示した。これらを基にアンケートを作成・実施し、結果を分析したところ、児童は他教科等の学びを総合的な学習の時間に生かしていないこと、情報収集の方法に偏りが見られること、総合的な学習の時間で文章や図、グラフを使って説明することへの苦手意識が高いことが分かった。

以上のような社会の背景と実態調査の結果を踏まえ、「小学校解説総合編」において重視されている教科横断的な学習に焦点を当てて研究をすることにした。教科横断的な学習を実現するためには､その学習の過程を目に見える形にして具体的に示すことが重要であると考え、研究主題を「総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力を明確にした授業改善～教科横断的な学習を支える「生かシート」の作成を通して～」と設定した。

Ⅱ　研究の視点

総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力を明確にするとともに、その育成における課題を解決するために必要な手だてを考え、授業実践を通して効果を検証する。

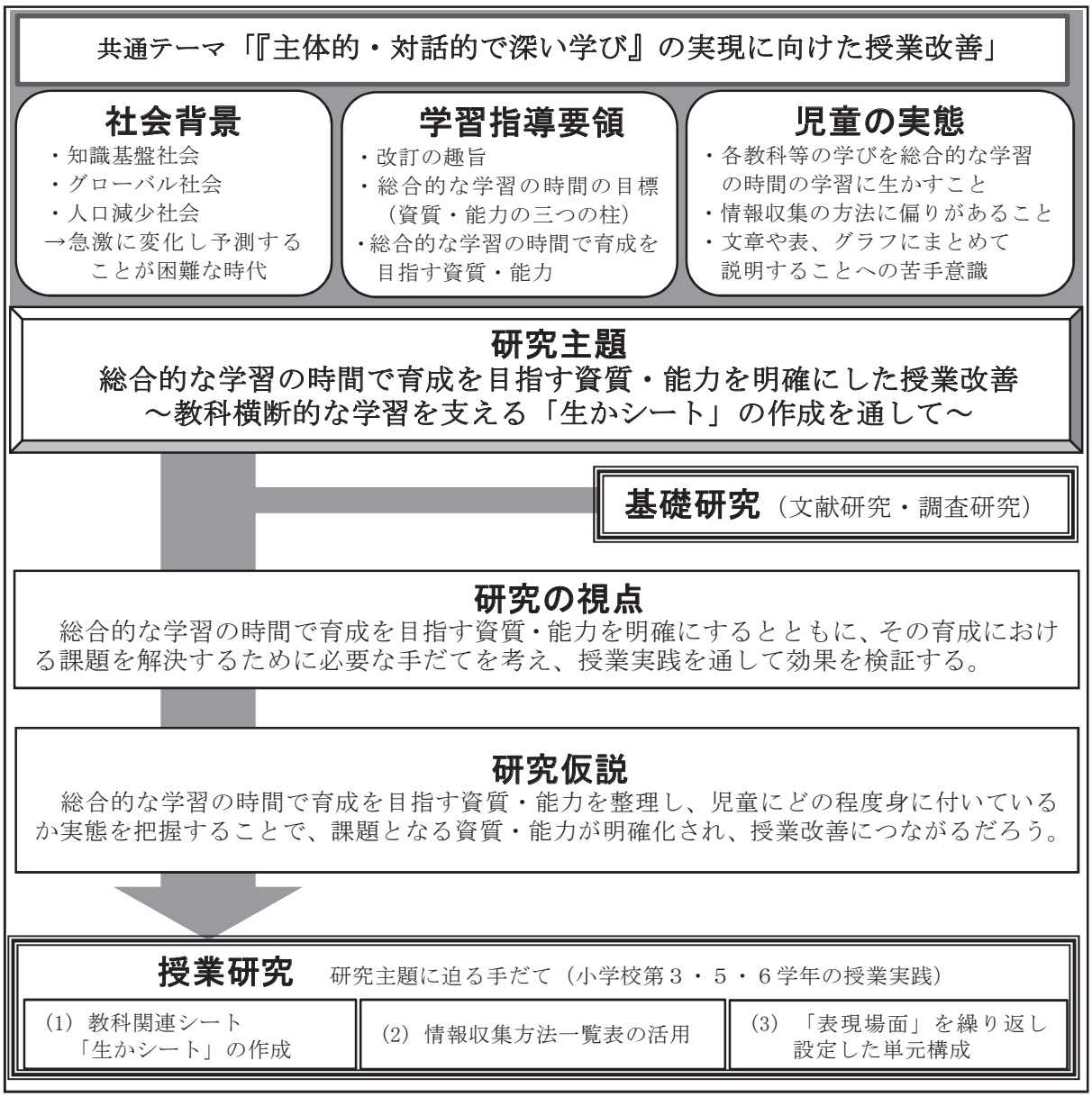
Ⅲ　研究仮説

総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力を整理し、児童にどの程度身に付いているか実態を把握することで、その育成における課題が明確化され、授業改善につながるだろう。

Ⅳ　研究方法

1　基礎研究	2　授業研究
(1)　文献研究を通して、総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力を明らかにした。 (2)　調査研究を行い、教員と児童の総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力の定着や、意識について実態把握をした。	(1)　アンケート調査を実施･分析することで､育成上、特に重視する資質・能力を明確にした。 (2)　課題として明らかになった資質･能力に応じた指導の手だてを講じた。 (3)　研究授業を行い、手だての有効性を検証した。

（研究構想図）



Ⅴ　研究内容

１　基礎研究

（1）　文献研究

総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力を明確にするため、「小学校解説総合編」などを参考にし、主題に関わる言葉を以下のように捉えた。

ア　「総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力」について

総合的な学習の時間の目標は、「探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことを通して、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力」を育成することである。また、「探究的な見方・考え方」とは、「小学校解説総合編」第２章第１節では、「各教科等における見方・考え方を総合的に活用するとともに、広範な事象を多様な角度から俯瞰して捉え、実社会・実生活の課題を探究し、自己の生き方を問い続けるという総合的な学習の時間の特質に応じた見方・考え方」であると述べている。さらに、「小学校解説総合編」の中で、「探究的な学習における児童の学習の姿」として、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現という一連の学習過程（以下、「探究的な学習の過程」と表記。）が示され、「探究的な学習の過程」を支えるのが「探究的な見方・考え方」であるとされている。これを受けて、本研究では、「総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力」とは、「各教科等における見方・考え方を総合的に活用し、探究的に学んでいく力」であることに焦点を当てて研究をすすめた。

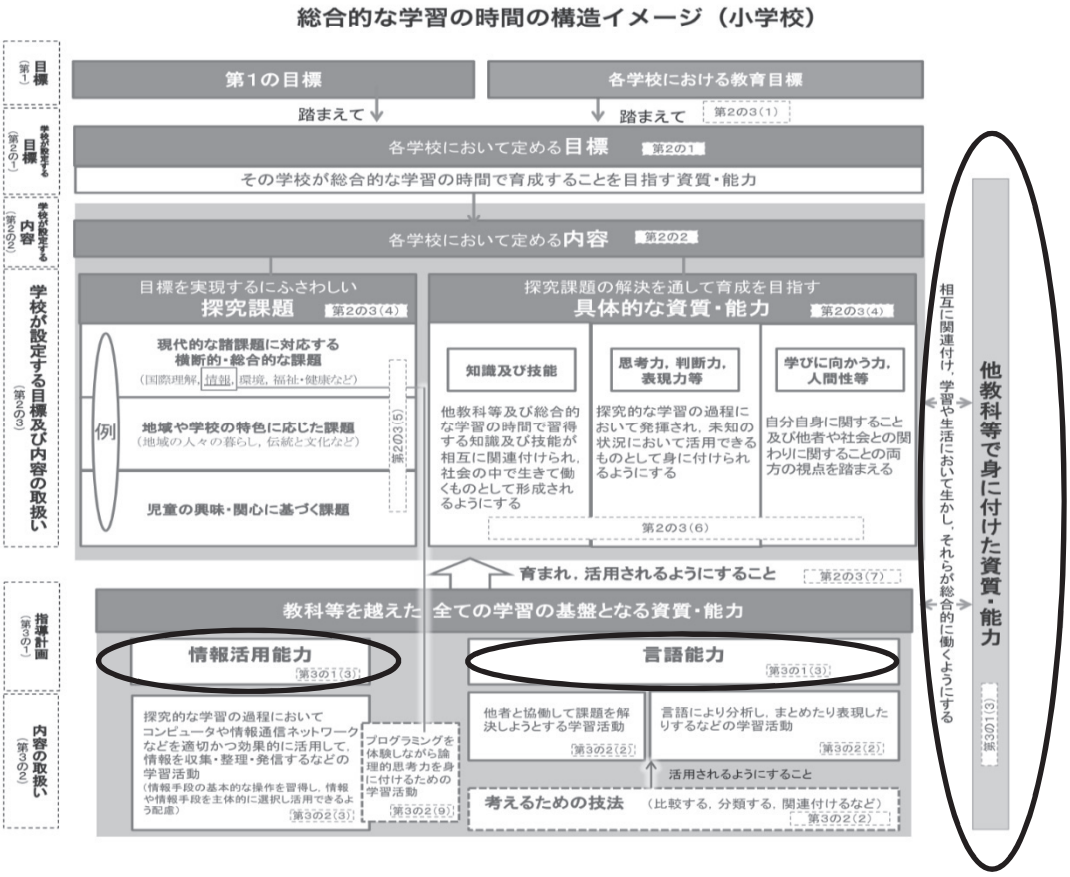


図１　「小学校解説総合編」（p18）より引用（丸囲みは部会による。）

しかし、「小学校解説総合編」には「総合的な学習の時間の構造イメージ」（図１）として、「第１の目標」（以下、「第１の目標」と表記。）における資質・能力以外にも、各学校において定める具体的な資質・能力や、他教科等で身に付けた資質・能力、教科等を越えた全ての学習の基盤となる資質・能力などいくつも示されており、これらの資質・能力を整理し、明確にする必要がある。

イ　資質・能力の明確化

総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力については、他教科等と同様に総則に示された「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱から明示されている。

「知識及び技能」とは、「各教科等で習得した概念を実生活の課題解決に活用することを通して、それらが統合され、より一般化されることにより、汎用的に活用できる概念を形成すること」であり、「技能と技能が関連付けられて構造化され、統合的に活用されるようになる。」と述べられている。つまり、課題解決のための探究的な学習の中で、既に習得している知識や技能を活用することで、知識や技能は関連付けられて、身に付いていく。

「思考力、判断力、表現力等」とは、「小学校解説総合編」第２章第１節で「実社会や実生活の中から問いを見いだし、自分で課題を立て、情報を集め、整理・分析して、まとめ・表現するという、探究的な学習の過程において発揮される力」と述べられている。「思考力、判断力、表現力等」は、これらの学習活動を繰り返しながら発展的に高めていくことが求められている。

「学びに向かう力、人間性等」とは、「小学校解説総合編」第２章第１節において、「よりよい生活や社会の創造に向けて、自他を尊重すること、自ら取り組んだり異なる他者と力を合わせたりすること、社会に寄与し貢献することなどの適正かつ好ましい態度」と述べられている。この態度を育成するためには、児童が探究的な学習に主体的に取り組むことが重要であり、児童が見通しをもち、自己の学習の成果と課題を振り返りながら学習に取り組むことが必要である。

これら資質・能力の三つの柱は、相互に関わり合いながら高められていくものである。

「小学校解説総合編」第５章第１節では、①各学校は、「第１の目標」を踏まえるとともに、各学校における教育目標を踏まえ、学校の総合的な学習の時間の目標を設定し、「目標を実現するにふさわしい探究課題」及び「探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力」を設定する。②各学校において定める目標及び内容については、各教科等の目標及び内容との違いに留意しつつ、各教科等で育成を目指す資質・能力との関係を重視することが望まれる。③「目標を実現するにふさわしい探究課題」及び「探究課題の解決を通して育成を目指す資質・能力」については、教科等を越えた全ての学習の基盤となる資質・能力が育まれ、活用されるものとなるように配慮することが大切であると述べられている。それら相互の関係は、「総合的な学習の時間の構造イメージ」（図１）に示されている。

総合的な学習の時間の授業改善を図るには、育成を目指す資質・能力の定着や教員の意識等について調査研究を行い、実態把握をする必要がある。そこで、総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力を具体的に列挙し、それらを基にアンケートを作成し、実施、分析することで、育成における課題を明確にし、授業の改善につなげることとした。

(2)　調査研究

ア　調査のねらい

総合的な学習の時間の学習において育成上、特に重視する資質・能力を明確にし、授業の改善につなげるため、本研究員の所属校で教員と児童を対象に調査を行った。

イ　調査概要

上記のねらいを達成するために、表１のとおりに実態を調査した。

表１　調査研究概要

	教員対象	児童対象
調査時期	平成 30 年７月	平成 30 年７月
調査対象	都内小学校５校の教員	都内小学校５校の第３～６学年の児童
調査方法	質問紙法（選択式・単一回答）20 項目	
サンプル数	45 人	1401 人

ウ　調査項目

調査項目は、文献研究により明らかにした総合的な学習の時間で育成を目指す資質・能力について、所属校等の実態を踏まえ具体化することにより、作成した（表２）。

表２　アンケート調査項目（全 20 項目）

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
既習内容を生かす力 文章にまとめる力 表やグラフに表す力 等	学習課題を見付ける力 学習のゴールイメージをもつ力 情報収集、整理・分析、表現する力 等	みんなで課題を決めて学習する意識 自分で課題を決めて学習している自覚 社会参画への意欲 等

エ　調査結果

所属校５校の教員 45 人、児童 1401 人を対象とした全 20 項目の調査のうち、以下の３項目について顕著な課題が見られた。

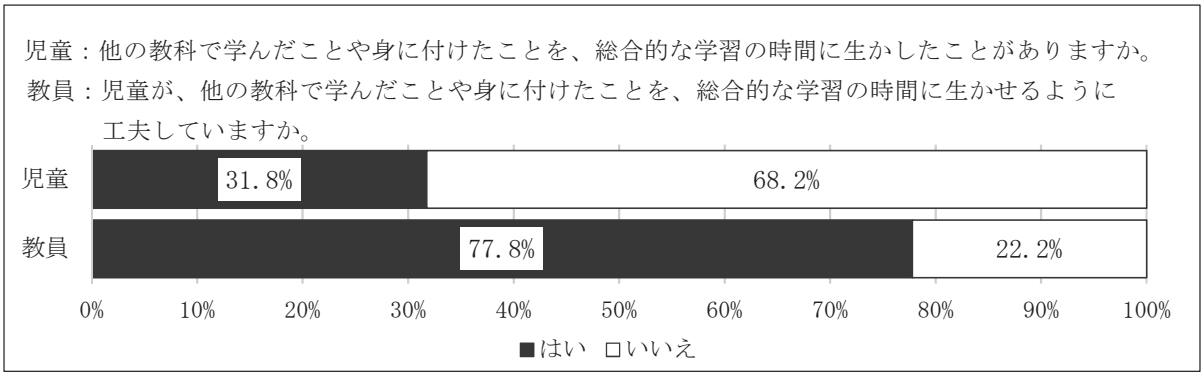


図２　他教科等の活用の実態に関する調査結果（児童・教員対象）

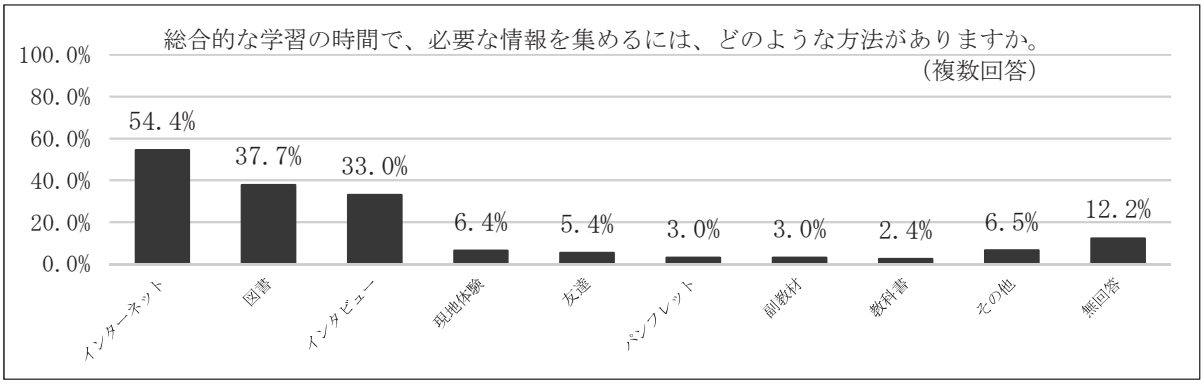


図３　情報収集の実態に関する調査結果（児童対象）

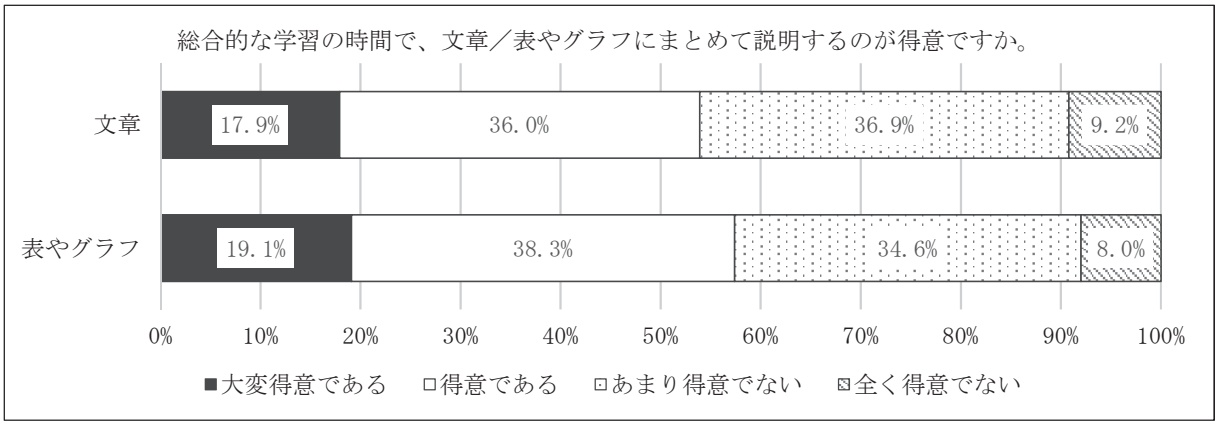


図４　表現方法の実態に関する調査結果（児童対象）

教員の 77.8%が「児童が、他の教科で学習したことや身に付けたことを、総合的な学習の時間に生かせるように工夫している」と回答した。しかし、「他の教科で学んだことや身に付けたことを、総合的な学習の時間に生かしている」と回答した児童は 31.8%にとどまっている（図２）。

児童にとって主な情報収集の方法は「インターネット」、「図書」、「インタビュー」である。これらの情報収集の方法においては、３～５割程度の回答にとどまっている。さらに、無回答の児童が 12.2%いた（図３）。

児童の 46.1%が「文章にまとめて説明するのが得意ではない」と回答し、42.6%が「表やグラフにまとめて説明するのが得意ではない」と回答した（図４）。

オ　考察

以上の調査結果から次のことが考えられる。

(ｱ)　多くの教員が「児童が、他の教科で学習したことや身に付けたことを、総合的な学習の時間に生かせるように工夫している」と考えているにもかかわらず、ほとんどの児童は「他の教科で学んだことや身に付けたことを、総合的な学習の時間に生かす」という意識が希薄である。

(ｲ)　児童は、様々な教科や領域等で情報収集の方法を学習しているはずだが、その情報収集の方法が十分身に付いているとは言えない。そのため、総合的な学習の時間で必要な情報を得るために適切な情報収集の方法を選択して活用できているとは言えない。

(ｳ)　各教科等で文章、表やグラフにまとめて説明する学習をしているが、定着が十分とは言えない。そのため、総合的な学習の時間でも、「まとめ、説明する」ことを身に付ける機会を確保する必要がある。

これらは、全て、他教科等で身に付けた資質・能力が活用されていないことを表している。こうした調査結果と「総合的な学習の時間の構造イメージ」（図１）として示されている資質・能力の関連から、各授業実践において「他教科等で身に付けた資質・能力」が総合的な学習の時間の学習と相互に関連付けられ、その他の学習や生活において生かされるようにすることや、「情報活用能力」、「言語能力」が育まれ活用されるようにすることを目指し、指導の手だてを講じることとした。

2　授業研究

(1)　研究主題に迫る手だて

基礎研究により明らかになった３点の課題に応じて、それぞれ指導の手だてを講じた。

ア　教科関連シート「生(い)かシート」の作成

総合的な学習の時間において、児童が各教科等の学びを生かすことができるように教科関連シート「生かシート」（図５）を作成する。学習を進める中で、児童とともに「生かシート」に各教科等との関連を書き足していくことで、児童が各教科等の学びと総合的な学習の時間との関連を自覚し、総合的な学習の時間に生かすことができるようにする。

イ　情報収集方法一覧表の活用

探究課題の解決に適した情報収集の仕方を選択できるように、情報収集の方法を一覧にまとめた（図６）。児童が情報収集方法一覧表を活用することで、児童の「情報収集するための知識及び技能」や、「情報収集の手段を選択する思考力、判断力」の向上を図る。

ウ　「表現場面」を繰り返し設定した単元構成

文章､表やグラフにまとめて説明する機会を増やすために､ペアやグループでの話合い、他学年や外部への発表などの「表現場面」を繰り返し設定する。表現する活動を多く経験することで、児童の「表現する知識及び技能」や、「相手や目的に応じて分かりやすくまとめ表現する力」の向上を目指す。

図５　教科関連シート「生かシート」（例）
（第３学年　「ブルーベリーを広めよう」）

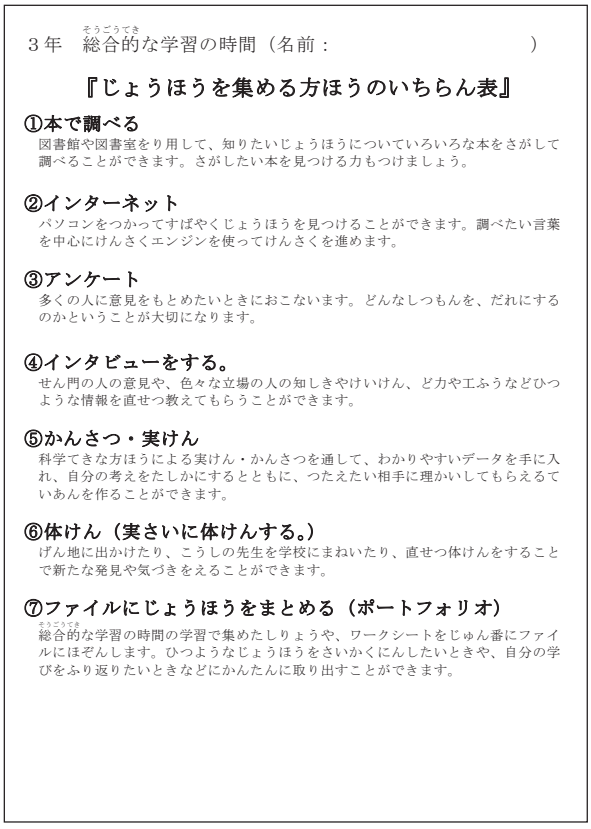


図６　情報収集方法一覧表（例）
（第３学年）

(2)　実践事例

実践事例１　探究課題を「情報（プログラミング）」とした実践例（小学校第６学年）

ア　単元名　「わたしたちの信号機をつくろう」

イ　単元の目標と評価規準

(ｱ)　単元の目標

信号機は様々な背景をもつ人のために適応していることを知り、自分たちの信号機作りを通して、地域のためによりよく行動できるようにする。また、信号機を制御するためには様々な教科で身に付けた知識が関連していることを知り、プログラミングを活用して、信号機の動作を理解する。

(ｲ)　単元の評価規準

観点	知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に学習に取り組む態度（主）
評価規準	(1)信号機が様々な背景や意図をもってその場所に作られていることを理解している。 (2)信号機のシステムや制御には、様々な教科の知識が関連していることを理解している。 (3)プログラミングの基本的な命令である「順次処理」「繰り返し」「条件分岐」を活用している。	(1)自分たちの町にある信号機に関する現状について多様な視点から考え、課題を見つけている。 (2)信号機や信号機を制御する仕組みに関する情報を的確に収集している。 (3)信号機の必要性や制御方法について集めた情報をもとにして、情報を整理・分析している。 (4)自分たちの町に必要な信号機を考え、効果的な方法で表現している。 (5)論理的に思考しながら、自分が作りたい信号機のプログラムを作っている。	(1)自分たちの町にある信号機の課題を発見したり、プログラミングを用いて課題解決したりする活動を通して、協働的に取り組もうとしている。 (2)自分たちの町に必要な信号機について他者理解を通じて考え、プログラミングを用いて実現しようとしている。 (3)自分たちの町に必要な信号機を様々な背景や目的に適用できるように考えることで、自分の考えが広がったり、新しくなったりしたことについて自己理解している。

ウ　研究主題に迫るための手だて

(ｱ)　教科関連シート「生かシート」の作成

アンケート結果より、本学級児童の 74.2%が、他の教科での学びを総合的な学習の時間の学びに生かしていないと答えている（図７）。これは、総合的な学習の時間の学びと各教科等の学びの関連性が低く、各教科等で身に付けた知識や技能が横断的に活用されていないということが考えられる。また、各教科等で育成された情報活用能力が総合的な学習の時間にも大いに生かされるはずであるが、自覚している児童は少ない。そこで、多くの児童が総合的な学習の時間と各教科等との関連性を実感できるようにするため、本単元内容と各教科等との関連を示した「生かシート」を作成し、教室内に掲示した。また、各児童の学習記録として残していけるように、児童用のワークシートとしての「生かシート」も併せて作成・活用した。

(ｲ)　情報収集方法一覧表の活用

本学級児童の情報を収集する方法は、インターネットや図書に偏っており、その他の情報収集の手段はあまり使われてこなかった。そこで、信号機についての知識・理解を深めるため、身近な存在である家族や学区内に駐在する警察官の方にインタビューを行い、情報収集するための知識・技能の向上を目指した。また、児童にどのような情報収集の手段があるのかを伝え、適宜、問題解決に適した情報を収集・選択できるようにする。

(ｳ)　「表現場面」を繰り返し設定した単元構成

アンケート結果から、総合的な学習の時間において、本学級児童の83.8%が「文章にまとめて説明すること」が得意でない、本学級児童の73.5%が「表やグラフにまとめて説明すること」が得意でないと答えている。児童の「説明すること」への苦手意識が高いという実態が明らかとなった。それは、本学級児童の「表現経験の少なさ」に起因していると考えられる。そこで、苦手意識を克服するため、多様な自己表現の場面を意図的に単元に位置付けた。本単元では、毎時間に振り返りを行い、百字程度で自分の意見をまとめさせ、自分の意見と他の児童の意見を比較させる等の表現場面を設定した。

エ　単元設定の理由

信号機は、児童が普段から使用しているものであり、私たちが安全・安心に生活をするためのシステムとして機能している。本校の特質として、学区域内に信号機がないということが挙げられ、「なぜ、学区域内にないのだろうか。」という身近な問題から課題を設定し、探究していく単元を構想した。また、「小学校解説総合編」には、「プログラミングを体験することが「探究的な学習の過程」に適切に位置付くようにすること」が示されている。そこで、探究的な学習の中で、プログラミングを活用して子供たちが問題を解決できるように設定した。本単元にとどまらず、安全・安心に生活するための技術や工夫に幅広く興味をもつことができるようにしたい。

オ　単元指導計画【全20時間（○内は時間数）】

	探究	□主な学習活動	○教員の支援 ☆主題に迫るための手だて((ア)、(イ)、(ウ))	評価規準
わたしたちの信号機をつくろう⑳	課題設定④	□歩行中の危険な経験から、信号機について関心をもつ。① □学区内の交差点で、危険な箇所がないかを調べる。① □危険な交差点について、調べてきたことを整理する。①（グループ活動） □課題を決定し、ゴールイメージをつくる。①	○地域の問題に気付きやすくするために、調査内容を多岐に広げず、学区内の交差点に焦点化する。 ○交差点について課題がもてるように、身近な人たちにインタビューを行う。 ☆「生かシート」を用意し、教室に掲示する各教科等の関連知識を記入する。(ｱ)	知(1) 思(1) 主(1)
	情報収集⑥	□「学区内には、なぜ信号機がないのか」という疑問をもつ。① □信号機の社会的機能と福祉的意味合いを調べる。③ □集めた情報を整理し、自分なりに信号機について理解する。① □「学習のゴールイメージ」を固める。 □信号機について理解を深め、自分の学区内に必要な信号機は、何かを考える。①	○信号機に対する自分の意識を確認するために、イメージマップに鉛筆で書き出すようにする。 ○様々な利用者の視点で信号機を調べるようにする。 ☆情報収集方法一覧表に載っている収集方法をチェックする。(ｲ)	知(1) 知(2) 思(1) 思(2) 主(1)
	整理分析④	【回路・電流の学習、信号機（順次処理）】 □プログラミングで信号機を再現する。① 【歩行者用信号機（繰り返し）】 □プログラミングで歩行者用信号機を再現する。① 【押しボタン式歩行者用信号機（条件分岐）】 □プログラミングで押しボタン式歩行者用信号機を再現する。① **（本時）** □歩行者用信号機の動作をプログラミングで表現できることを振り返る。理想の信号機をつくる。①	【情報活用能力・論理的思考力の育成】 ○信号機の動作を理解させるために、理科で学習した回路図を用意する。 ○プログラミングの理解が進むように、簡単な学習内容から順番に取り上げる。 （順次処理→繰り返し→条件分岐） ○コンピュータへの入力を容易にするため、事前にワークシートにプログラミングをまとめさせておく。 ☆自分の作ったプログラムを友達に説明する場を多く設ける。(ｳ)	知(3) 思(3) 思(4) 思(5) 主(2)

	まとめ表現⑥	□理想の信号機を想起する。① □理想の信号機を作るには、どうすべきか考える。（計画）② □自分の考えを基に、理想の信号機をプログラミングで作成する。 □発表会を開き、意見をもらう。② □学習を振り返り、信号機の役割を考える。 □これまでの活動を振り返り、自己の成長に気付き、これからの生活を考える。①	○「実現できるかどうか」「効果があるかどうか」の二つの視点で考えを整理する。 ○理想の信号機作りを通して、誰に、何を、何のために、どのように伝えたいのかを考える。 ○相手を意識できるようにする。 ☆国語科で学習したポスターセッションの方法を活用し、信号機の役割について他学年に向けて発表をする。(ｱ)、(ｳ)	知(2) 思(4) 主(3)

カ　本時について（13/20 時間）

(ｱ)　本時の目標

校門前になぜ信号機が必要なのかを考え、信号機の動作をプログラミングで表現することができる。

(ｲ)　本時の構成

	□主な学習活動 ・予想される児童の発言	○教員の支援 ☆主題に迫るための手だて((ｱ)、(ｲ)、(ｳ)) ◆評価規準
導入（5分）	□本時の学習目標を確認する。 前時：「順次処理」「繰り返し」 本時：「条件分岐」	○前時までの確認をする。学習の見通しをもつ。 ☆本単元と関連する理科の学習を想起させながら、本時で扱うプログラムを確認する。(ｱ)
	校門前に、押しボタン付きの信号機をつくろう。	
展開（30分）	□歩行者用信号機のプログラムをする。 【計画・プログラミングの時間】(10 分) □友達のプログラミングを参考にして、自分たちのプログラミングを完成させる。 【アドバイスタイム】(５分) ・友達の意見を参考にしたら、上手く動作した。 □動作確認・動作修正（デバッグ）を行う。 【ロボットにプログラミングを転送】(10 分) □理想の信号機を作る。 ・地域の信号機と同様の秒数にしたり、道路や渡る人をイメージして作りかえたりしたい。 □自分たちが作った理想の信号機を紹介し合う。 【全体交流の時間】(５分) ・どのようなプログラムを組んだのか、どのように自分の理想とする信号機を実現したのかを全体で発表し合いたい。	○机間指導 ○ペア内で意見を交換することができるようにする。 ◆プログラミングの基本的な命令「順次処理」「繰り返し」「条件分岐」を活用している。 知・技(3)（発言、プログラミング） ☆友達と相談して、プログラミングを進めていけるように、アドバイスを行う。(ｲ) ○順調に進んでいる場合は、更に条件を加えてみるよう助言する。 ☆自分たちで調べた内容を基に、理想の信号機のモデルを考え、プログラミングを用いて実現していく。(ｳ) ◆論理的に思考しながら、自分が作りたい信号機のプログラムを作っている。 思・判・表（5）（発言、ワークシート）
終末（10分）	□今日の学習の振り返りを行う。 □今日の学習で学んだことやもっと調べてみたいことなどを 100 字で記入する。 ・校門前には、歩行者が優先の信号機が必要だ。 ・車と歩行者の事を両方考えながらプログラミングするのは難しかった。	○振り返りの視点を提示し、プログラミング上で工夫した点や理想の信号機の動作をプログラミングした時の工夫した点などを振り返られるようにする。 ☆自らの学習を自分の言葉でまとめ、表現する機会を設ける。(ｳ)

キ　考察

(ｱ)　教科関連シート「生かシート」の作成

児童同士の対話を通して「生かシート」の作成を行い、教室掲示によって他教科等との関連を意識できるようにしたことで、単元の達成目標が明確になり、他教科等での学びを生かそうとする児童が 74.2%となり、単元前と比較して 48.4 ポイント増加した（図７）。

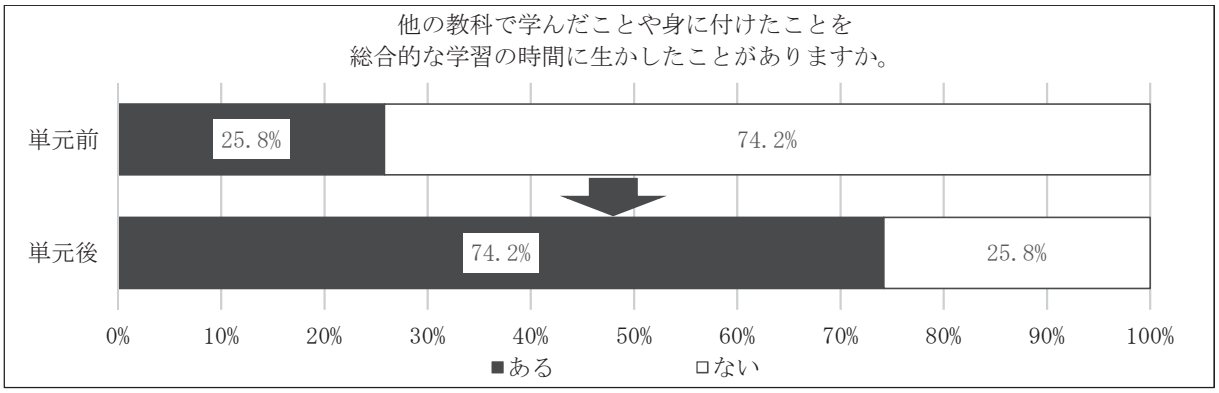


図７　他教科等の活用の実態に関する調査結果（本学級児童対象）

(ｲ)　情報収集方法一覧表の活用

児童が実現したい信号機のプログラムを作る際に、情報収集方法一覧表を活用することにより、インターネット以外にも家族や地域の人に聞きたいという意識が芽生え、これまであまり行われてこなかった、家族やゲストティーチャーに対するインタビューで情報収集をする姿が見られた。

今後は、目的に合わせて情報収集の方法を選択することによって児童の情報収集の方法の選択の幅をより広げていきたい。

(ｳ)　「表現場面」を繰り返し設定した単元の構成

児童は、振り返りや小グループでの話合いなどの多様な場面において、自分の考えや調べたことをまとめたり、発表したりする体験を何度も重ねた。単元前後の児童アンケート調査(図８)から､文章にまとめて説明するのが得意な児童が単元前 16.1%から単元後 42%に、表やグラフにまとめて説明するのが得意な児童が単元前 26.5%から 40%に増加した。これは、本単元において児童が文章にまとめたり、ポスターにまとめたりする場面を意図的に多く取り入れたためと考えられる。

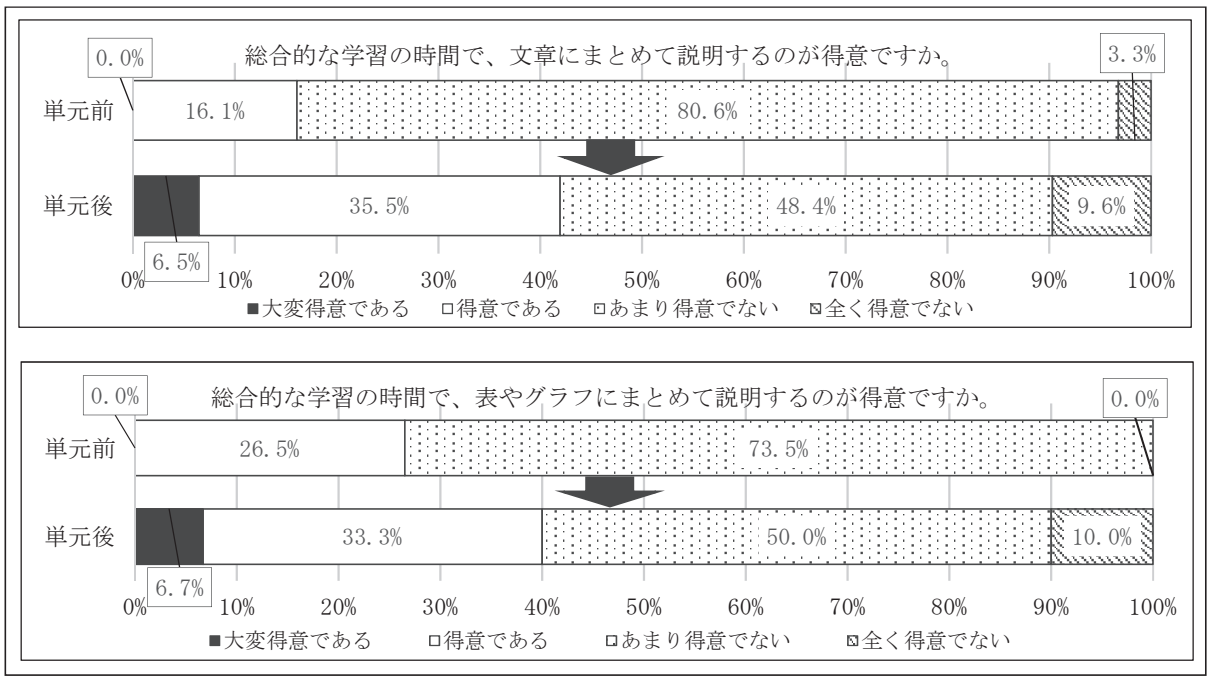


図８　表現方法の実態に関する調査結果（本学級児童対象）

実践事例２　探究課題を「福祉」とした実践例（小学校第６学年）

ア　単元名　「今自分たちにできること！～高齢者との関わりから～」

イ　単元の目標と評価規準

(ｱ)　単元の目標

・身近な高齢者や高齢者を支える関係者・家族との関わりを通して、我が国の「超高齢化社会」や「本区の高齢者を支える取組」を理解し、介護者や家族の思いに触れながら直接的・間接的に高齢者を支える取組を実行する。

・高齢者との関わりの中で、多様な立場の人々が支え合いながら共生していることを理解し、社会に参画しようとする態度を養う。

(ｲ)　単元の評価規準

観点	知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に学習に取り組む態度（主）
評価規準	(1)超高齢化社会の現状を理解するとともに、本区の高齢者を支える取組や地域の努力があることを理解している。 (2)高齢者と高齢者を支える人々の思いを知り、高齢者と自らの生活をつなげて考え、多様な立場の人々が共生していく大切さを理解している。 (3)目的に応じた情報収集・表現方法を理解し、選択している。	(1)高齢者の生活を取り巻く現状や課題について多様な視点から考え、課題を見いだしている。 (2)高齢者や高齢者を支える人々との直接的な関わりから情報を収集している。 (3)高齢者を支える方法について目的や相手を根拠にしながら、情報を整理・分析している。 (4)超高齢化社会について自らの生き方とつなげて考えたり、効果的な方法で表現したりしている。	(1)身近な高齢者や高齢者を支える人々と進んで関わり、これらの人と交流を深め、自分の考えが広がったり、新しくなったりしたことについて理解している。 (2)多様な立場や他者の存在を受け入れ、超高齢化社会に関する課題の解決に協働的に取り組もうとしている。

ウ　研究主題に迫るための手だて

(ｱ)　教科関連シート「生かシート」の作成

総合的な学習の時間で生かすことができている知識・技能を、児童が付箋に書き出し学級全体で共有した。作成した「生かシート」は教室に掲示し、児童が「探究的な学習の過程」と、現在取り組んでいる学習とのつながりを意識できるようにした。

(ｲ)　情報収集方法一覧表の活用

情報収集の段階では、児童が「高齢者に関してもっと知りたいこと」を個別にカードに書き出した。その際、調べたいことがらを明らかにするためにはどの情報収集の方法が適しているか、児童の目的意識に合わせて考え、適切な情報収集の方法を選択させる機会を設定した。「人に聞かないと分からないこと」については、交流会やインタビューという形で情報収集を行い、「インターネットで分かること」についてはパソコンによる調べ学習を行った。

(ｳ)　「表現場面」を繰り返し設定した単元構成

本単元では、個別やグループの考えを伝え合い、学級の考えとして構築していく話合い活動を繰り返し設定した。さらに、地域との交流会においても繰り返し自己表現する場面を設定した。

エ　単元設定の理由

日本人の４人に１人が高齢者となり、超高齢化社会を迎えている。また、老老介護、介護士の人手不足など高齢者の生活に関する様々な社会問題が生まれている。本実践はそうした現状を踏まえ、児童が様々な立場の人々との関わりの中で「自分たちにできること」を模索していく単元となっている。活動アイディアを実行していくまでの「探究的な学習の過程」を通して、児童の共生意識や社会参画意識を高めることができると考えた。

また、認知症サポーターや介護士の方などとの関わりから高齢者を支える側の苦悩や喜びに触れていく。そうした人々の「思い」に気付き、「自分たちにも何かできることがあるのではないか」という切実感につながると考えた。特に情報収集の場面では、実際に地域の高齢者と関わることで、明確な相手意識や目的意識をもって活動に取り組めるようにしていく。「誰に聞くのか」「誰に発信するのか」という問いが情報収集や議論の質を高め、超高齢化社会に関わる知識や､表現する技能などの資質･能力の育成につながると考える。

オ　単元指導計画【全 15 時間（〇内は時間数)】

	探究	□主な学習活動	〇教員の支援 ☆主題に迫るための手だて((ア)、(イ)、(ウ))	評価規準
今自分達にできること！～高齢者との関わりから～⑮	課題設定①	□「高齢者」についての考えを広げ、課題意識を高める。①	☆教科関連シートを用意し、教室に掲示する。(ｱ) ☆ウェビングマップを単元の導入場面と終末場面に行い、「高齢者」に対する児童の知識・概念が新しくなったり、広がったりしたことを自己理解することができるようにする。(ｳ)	主(1)
	情報収集④	□介護福祉施設に通う高齢者や高齢者を支える人々との関わりから「超高齢者化社会」に関する情報を集める。④	〇児童の「知りたいこと・調べたいこと」という内容項目からゲストティーチャーとの関わりやインターネット・本などを活用した情報収集の方法を選択できるようにする。 ☆調べる方法として、情報収集一覧表を提示する。(ｲ) ☆交流会を設定し、自分達の考えや思いを表現する場を設定する。(ｳ)	知(1) 知(2) 知(3) 思(1) 思(2) 主(1)
	整理分析④	□自分達にできることについて、これまでの経験を踏まえて考え、取り組む活動を決める。④ **（本時）**	〇相手意識、目的意識をもち、活動に取り組むことができるよう活動の「意味」や「価値」「効果」などを論点に議論を展開していくようにする。 ☆比較するなどの「考える技法」を活用し、児童が「表現する」ことを支援する。(ｳ) ☆他教科との関連について振り返り、「生かシート」に項目を加える。(ｱ)	知(3) 思(3) 主(2)
	まとめ表現⑥	□考えたアイディアを実行し活動の振り返りをする。⑥	〇地域のお祭りや校内の集会、保護者への発表など、児童の課題意識を基に発表する場を調整する。 ☆これまでの経験から「高齢者」に関する概念をウェビングマップで表現するとともに文章化することで自己理解を確かなものにする。(ｳ)	知(1) 知(2) 思(3) 思(4)

カ　本時について（８/15 時間）

(ｱ)　本時の目標

目的意識や相手意識を明確にし、活動アイディアを比較したり、関連付けたりして根拠を明らかにしながら、高齢者を支援するための活動を学級で決定する。

(ｲ)　本時の構成

	□主な学習活動 ・予想される児童の発言	○教員の支援 ☆主題に迫るための手だて（(ｱ)、(ｲ)、(ｳ)） ◆評価規準
導入（5分）	□前時までの学習を振り返る。（全体） □本時のめあてを確認する。（全体） ・取り組む活動を決めよう。	○児童の言葉からめあてを設定する。 ◆本時の活動について具体的な言葉で表現している。 知・技(3)（発言・行動観察）
	高齢者のためになる取組を決めよう。	
展開（35分）	○学級で実行する活動を各グループで検討する。 （グループ・10 分） ○学級として実行する活動を話し合い、決定していく。 （学級全体・25 分） ・できることから取り組む内容をしぼるのはどうだろう。 ・高齢者と関わることが大切なのではないのかな。	☆ホワイトボードを活用し、個別の考えをグループの考えとして共有することができるようにする。(ｱ) ○教師は児童の発言をつなげることで児童が、主体的に話し合うことができるよう支援する。 ◆根拠を明らかにしながら話したり、自分の考えと友達の考えを比較、関連させたりしながら聞き、考えている。 思・判・表(3)（発言・行動観察）
終末（5分）	○本時の学習を振り返る。 （個別・５分） ・関わることで高齢者を支えたい。 ・友達と話し合うことで自分の考えが変わった。	□話し合ったことや次時の課題など、自己の活動を振り返って書いている。主(2)（ワークシート）

キ　考察

(ｱ)　教科関連シート「生かシート」の作成

単元前は他教科での学びを生かしていると回答した児童が 28.3%であったのに対し、単元後は 82.1%となり単元前と比較し他教科での学びを生かそうとする児童が 53.8 ポイント増加した（図９）。「生かシート」の教室掲示や児童同士の対話から教科との関連を意識させたことで、総合的な学習の時間において教科等の学びを生かそうとする児童の意識の向上を図ることができたと考えられる。

「生かシート」の作成により、総合的な学習の時間において各教科の学習内容がどう生かされるかについて、児童の意識向上を目指した。より児童の意識を向上させるためには各教科の学習内容のみとの関連性を掲示するのではなく、各教科における「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」と総合的な学習の時間における資質・能力がどうつながり、生かされるのかについても教員、児童ともに意識できるようにする必要があると考えている。

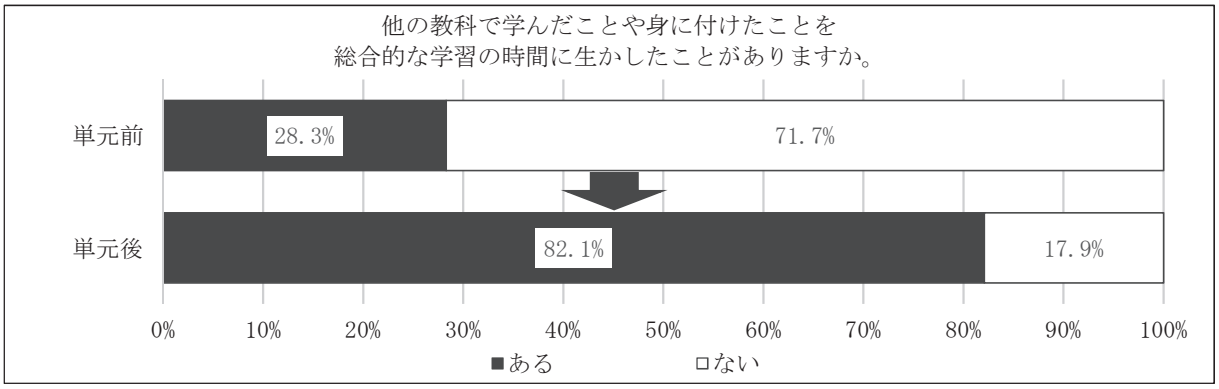


図９　他教科等の活用の実態に関する調査結果（本学級児童対象）

(ｲ)　情報収集方法一覧表の活用

情報収集活動を通して、思いや考え、気持ち等について調べる際には人と直接関わる情報収集の方法を選択し、その他についてはインターネットや本で調べるというように、情報収集の方法を児童が主体的に選択することで、目的に合った情報収集の方法の選択ができるようになった。

(ｳ)　「表現場面」を繰り返し設定した単元構成

児童は多様な場面や相手に対して、自分の考えや調べたことを発表するという活動を通して表現場面を繰り返し経験した。しかしながら、表現方法の実態に関する調査結果には単元前と単元後のポイントに大きな変化が表れていない(図 10)。表現場面については、「探究的な学習の過程」で「表現する必然性」があるかどうかが重要である。場面や相手を意識した必然性のある表現場面を単元に設定することが課題であったと考えている。

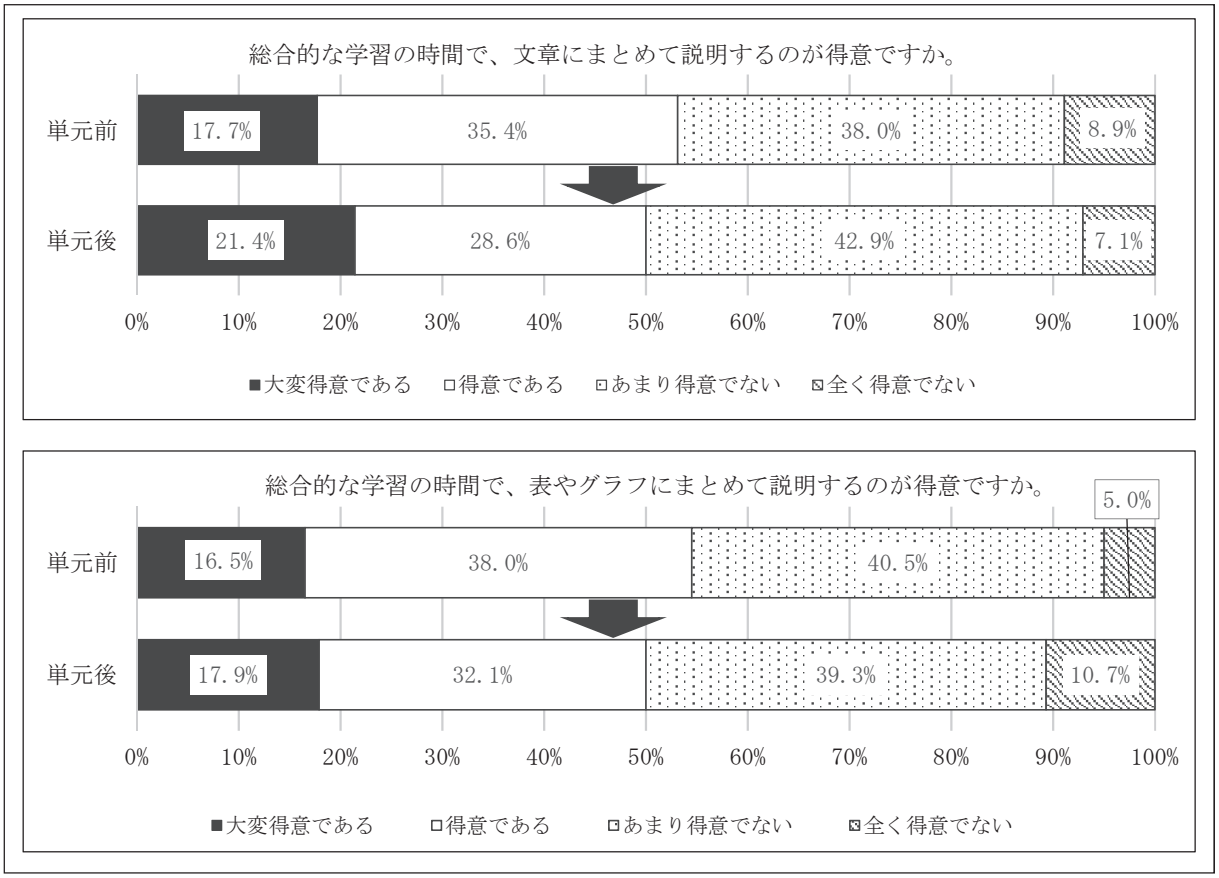


図 10　表現方法の実態に関する調査結果（本学級児童対象）

実践事例３　探究課題を「地域」とした実践例（小学校第３学年）

ア　単元名　「ブルーベリーを広めよう～十小宣伝隊コダレンジャージュニア～」

イ　単元の目標と評価規準

(ｱ)　単元の目標

本市の特産品である「ブルーベリー」について調べて伝える活動を通し、地域の良さを実感し、地域の一員であることに誇りをもてる活動を実践する。

(ｲ)　単元の評価規準

観点	知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に学習に取り組む態度（主）
評価規準	(1) 本市の特産品であるブルーベリーについて、いろいろな方法を使って調べようとしている。 (2) 目的に応じた情報収集・表現方法があることを理解している。	(1) ブルーベリーと本市の関わりについて考えている。 (2) 調べた内容を相手に分かりやすく伝えるために、様々な表現を工夫しようとしている。	(1) ブルーベリーに関わる人々の思いや願いを知ろうとしている。

ウ　研究主題に迫るための手だて

(ｱ)　教科関連シート「生かシート」の作成

他教科とのつながりを視覚化し、学びを意識させるために「生かシート」を活用する。学級全体の話合いで作成した掲示用「生かシート」と、児童個人で作成し、ポートフォリオに綴じて使う個人用の「生かシート」を用意する。

児童に配布した「生かシート」に、理科で学んだ植物の知識や、社会で習得した市内の地図を読み取る力を活用し、これまでの学習と関連付けて学べるようにする。

(ｲ)　情報収集方法一覧表の活用

教員が作成した情報収集方法一覧表を使用して、情報の収集をすることで、目的に合った効果的な方法で情報を集める力を身に付けさせたい。国語で覚えたローマ字を使ってパソコンでブルーベリーに関する情報を収集し、社会で学んだインタビューの方法を使って、農家の方へインタビューを行えるようにする。

(ｳ)　「表現場面」を繰り返し設定した単元構成

自分たちで調べたことを、相手に伝わりやすい言葉で表現する方法として、本市のブルーベリーと自分たちの関わりを「歌詞」に表し、歌を作る活動を行った。国語で学んだ俳句のリズムや、音楽で覚えたリズム打ちの考えを生かして歌詞を書き、楽曲は児童に馴染みのある歌を替歌にし、音楽による表現の楽しさを経験させた。１年間のまとめの際には２学期の経験を生かし、本市の良さを宣伝する歌を作詞・作曲する活動を行う。

エ　単元設定の理由

児童は市内の遊歩道「グリーンロード」を題材として地域探険や調べ学習を中心に探究的な学習を行い、パンフレットにまとめて発表会を行った。２学期は地域キャラクター「コダレンジャー」の一人である「ブルーベリーパープル」を取り上げ、本市のブルーベリーについて歴史や栽培方法、調理方法などを探究した。これらの活動を通して、地域のよさに気付き発信し、自分たちも市民の一員として関わりながら、地域の一員であることに誇りをもたせたいと考え、本単元を設定した。

オ　単元指導計画【全 30 時間（○内は時間数）】

	探究	□主な学習活動	○教員の支援 ☆主題に迫るための手だて((ア)、(イ)、(ウ))	評価規準
本市の良さを宣伝しよう㉚	課題設定⑤	□本市の地域キャラクター「ブルーベリーパープル」について調べる。② □ブルーベリーについてイメージを膨らませ、共有する。① □本市の良さを自分たちで伝えることができないかを話し合う。① □単元の達成目標を設定する。①	☆１学期に調べたグリーンロードのことを思い出せるように促す。(ア) ☆マップでイメージをふくらませる。(ア) ○誰を対象にするのか、どこで宣伝するのかなども話し合うように促す。 ☆ワークシートを配布し、活動の見通しを記入することで達成目標を明確にさせる。(ウ)	知（1） 思（1） 主（1）
	情報収集⑧	□パソコンや図書資料、地域パンフレットなどでブルーベリーについて調べる。③ □どんなことを調べるのかを考える。① □分類したことを更に詳しく調べるため、学習グループに分かれ、ブルーベリーについて調べる。④	○ブルーベリーについての資料を事前に教員が集めておく。 ☆各教科と総合的な学習の時間の関連を意識させる。(ア) ☆情報収集方法一覧表の活用を促す。(イ) ○調べたことをカードに記載し、共有する。	知（1） 知（2） 思（1）
	整理分析⑧	□ブルーベリーについて調べた情報を整理する。③ □栄養士をゲストに招待し、本市とブルーベリーの関係や、学校給食との関わりを学ぶ。① □栄養士にお礼のお手紙を書く。① □歌詞を制作する②**（本時）**	☆本市とブルーベリーの関係について話を聞く機会を設定する。(イ) ☆国語科の学びを生かし、手紙を書くことができるようにする。(ア)（ウ） ☆分かりやすく伝わりやすい言葉でまとめられるようにする。(ウ)	思（1） 思（2）
	まとめ表現⑨	□調べたことを宣伝用ポスターにまとめる。③ □宣伝発表会に向けてリハーサルをする。② □本市の職員の方を招待し、本市のブルーベリーについて宣伝発表会をする。② □発表会の振り返りをする。① □次の単元への見通しをもつ。①	☆表やグラフを使ったまとめ方を示す。(ウ) ☆本番に向けた発表会のリハーサルを設定し、自信をもって発表できるようにする。(ウ) ☆発表方法の良かった点と更に良くしたい点を具体的に挙げ、今後の課題意識をもてるようにする。(ウ)	知（2） 思（2） 主（1）

カ　本時について

(ア)　本時の目標

私たちの町特産のブルーベリーの歌詞作りを通して、本市に対する思いを表現する。

(イ)　本時の構成

	□主な学習活動 ・予想される児童の発言	○教員の支援 ☆主題に迫るための手だて((ア)、(イ)、(ウ)) ◆評価規準
導入（5分）	□本時のめあてを確認する。	☆自分たちで調べたことを歌にするということで児童の意欲を引き出す。(ウ)
	わたしたちの町とくさんのブルーベリーの歌を作ろう。	
展開（35分）	□歌詞にどんな言葉を入れたらいいかを話し合う。 ・本市のブルーベリーの良さを伝えたい。 ・小さい子からお年寄りまで歌える歌詞にしよう。 □書き出した短冊を共有する。 ・俳句のように短い言葉にまとめたい。 ・音楽のリズム遊びを意識した言葉がいい。 □歌詞の並びを考える。 ・歌詞のならび方は意味が伝わるようにしよう。 □実際に歌ってみる。	○自分たちの地域のブルーベリーに対する思いを明確にできるように、指導する。 ○１行の詩を書くための短冊を配布する。 ○グループで話合いをする。 ◆地域に対する思いを歌詞で表現しようとしている。 思・判・表（2）（ワークシート） ☆書き終えた短冊の順番や歌詞の意味を考えながら、よりよい表現を目指す。(ウ) ○並べた歌詞で実際に歌う。
終末（5分）	□授業の振り返りをする。 ・みんなで歌うと気持ちが良かった。 ・本市のブルーベリーの良さが分かった。 ・みんなに本市のブルーベリーの良さを伝えたい。	○ワークシートに授業の感想を書く。

キ　考察

(ｱ)　教科関連シート「生かシート」の作成

「生かシート」の作成に当たっては、学級全体の中で作成方法の手順を確認した後、グループで話合いをし、児童一人一人が自分の「生かシート」を仕上げた。最後に全体で学級掲示用の「生かシート」を作成し、使用することで各教科等の既習事項を想起することが可能となり、各児童の教科関連に対する意識を高めることができた（図 11）。

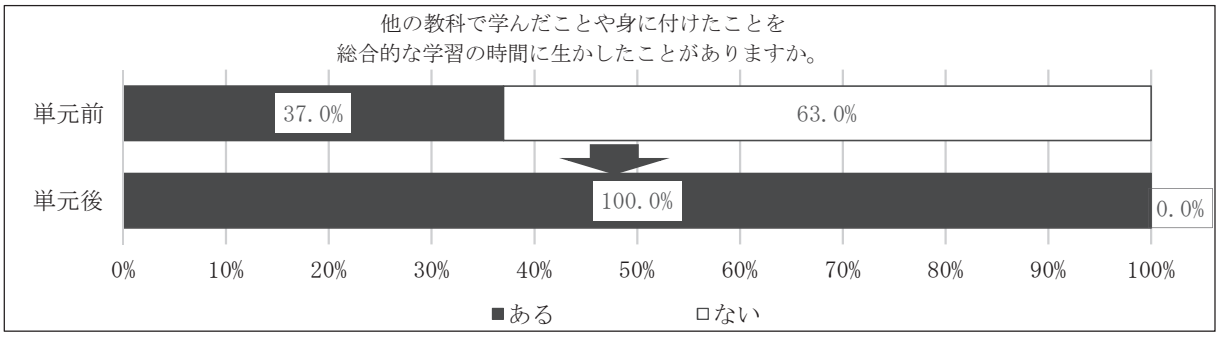


図 11　他教科等の活用の実態に関する調査結果（本学級児童対象）

(ｲ)　情報収集方法一覧表の活用

教員が作成した情報収集方法一覧表を児童が活用することによって、より適切な方法を選択できるようになった。これまでは情報収集の方法がインターネットに偏っていたが、直接話を聞くインタビューや新聞、図書館の本や地域のパンフレットを入手して活用するなどの選択の幅が広がった。

(ｳ)　「表現場面」を繰り返し設定した単元構成

作詞活動、ポスターの作成、発表会など様々な表現場面を設定し、表現活動を繰り返したことで児童自身が表現力の高まりを感じることができた（図 12）。「大変得意である」と回答した児童が減少したのは、学習を通じて自己評価が厳しくなったためと考えられる。

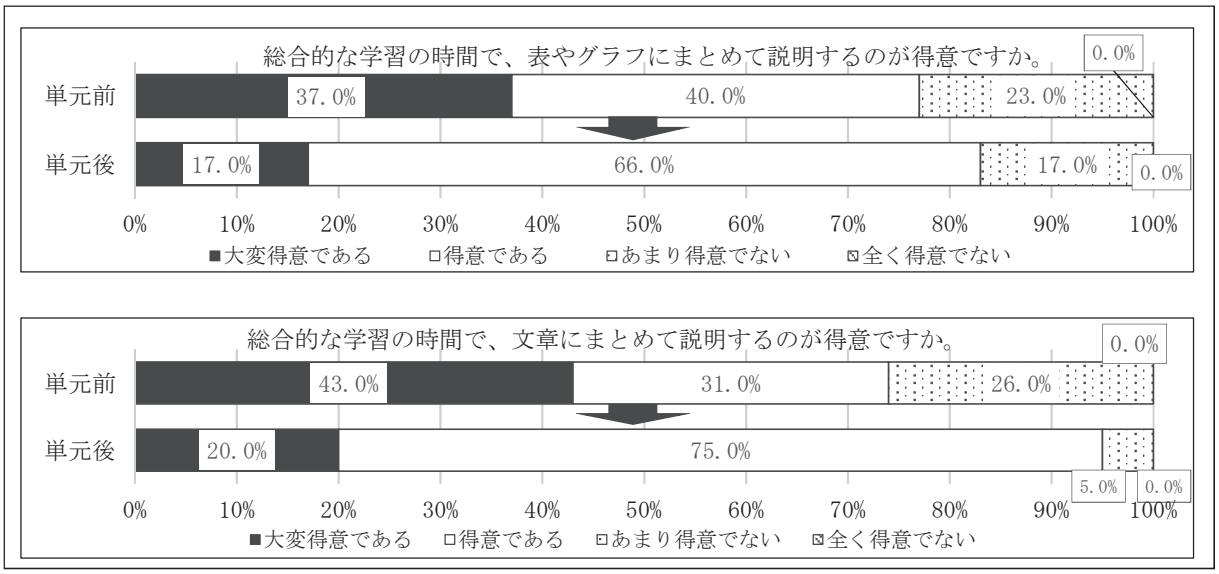


図 12　表現方法の実態に関する調査結果（本学級児童対象）

実践事例４　探究課題を「国際理解」とした実践例（小学校第５学年）

ア　単元名　「世界の人が住みやすい街に～多文化共生のためにできること～」

イ　単元の目標と評価規準

(ｱ)　単元の目標

地域で暮らす外国人との関わりを通して、外国人が多く住む地域の良さや問題点を知り、文化や価値観に気付き、互いに認め合いつながり合おうとする。

(ｲ)　単元の評価規準

観点	知識・技能（知）	思考・判断・表現（思）	主体的に学習に取り組む態度（主）
評価規準	(1)多文化共生を進めるための区役所の方の思いや活動内容を理解している。 (2)他国には多様な文化や習慣があることや、自分の地域に住む外国人の現状や問題が存在するということを理解している。 (3)目的に応じた情報収集・表現方法を理解し、活用している。	(1)自分の地域の国際化に関する現状や問題を把握し、課題を見いだしている。 (2)自分の設定した課題に向けて、情報を的確に収集している。 (3)集めた情報を、目的を明確にし、相手意識をもって整理・分析している。 (4)相手や目的に応じた方法で、まとめたり表現したりしている。	(1)同じ地域に暮らす人同士、互いの国を尊重し、多様な価値観を認め合おうとしている。 (2)国際色豊かな地域に住む一員として外国人との関わりをもち、協働して自分の地域に住む外国人と課題を解決しようとしている。

ウ　研究主題に迫るための手だて

(ｱ)　教科関連シート「生かシート」の作成

授業の中で、学習事項と他教科等との関連に気付いたときにその内容を「生かシート」に書き込んでいくことで、外国について集めた情報を基に考える際に、社会科の教科書や地図帳を活用したり、人との関わりについて考える際に、道徳の資料等を取り上げたりするなど、これまで学習したものを自分から活用することを意識できるようにする。

(ｲ)　情報収集方法一覧表の活用

「地域の国際化」について情報収集を行う際、情報収集方法一覧表を配布し、適切な方法はどれなのか考えさせるようにする。特に、社会情勢についてはインターネットだけでなく、本や新聞などを選択したり、区役所の人や外国人に直接聞くべき項目についてはインタビューを選択したりするなど、多様な情報収集の方法を選択できるような課題を設定するようにした。

(ｳ)　「表現場面」を繰り返し設定した単元構成

単元の中で、児童が表現する機会を多くとるようにする。課題を解決するために調べたことを学級内や校内、地域へと発表の対象を広げていくことで、相手意識をもち、より分かりやすく伝える方法を考え深められるようにした。また、毎時間の終わりに振り返りを書く時間を確保することで、自己の考えを言葉で表現し、考えをまとめられるようにする。

エ　単元設定の理由

本区は、東京都の中で外国人住民が最も多い自治体である。区としても、「こうした外国人が多く住み暮らすことを区の特性として積極的にとらえ、国籍や民族等の異なる人々が互いの文化的違いを認め、理解し合い、共に生きていく多文化共生のまちづくりを推進」している（新宿区地域振興部・多文化共生推進課ＨＰより）。しかし、言葉の壁、生活のルールやマナー、関わりの少なさ等の問題をはじめとするなど、多文化共生のために地域が

抱える問題は多数あるのが現状である。

本校でも、各学級の約１～２割は外国から来た児童である。本学級でも様々な国から来た両親をもつ児童が在籍しており、児童にとっても外国から来た人は身近な存在である。地域の人と関わり合い、協力しながらよりよく暮らしていくためにどうすればよいかを考え、行動できる力を育てたいと思い、本単元を設定した。

オ　単元指導計画【全 35 時間（○内は時間数)】

次	探究	□主な学習活動	○教員の支援 ☆主題に迫るための手だて((ア)、(イ)、(ウ))	評価規準
一次　自分たちの町に住んでいる人のことを知ろう⑮	課題設定②	□本区の外国人人口の割合を知り、「国際理解」について課題意識を高める。① **（本時）** □課題解決の見通しをもつ。①	○国語科で学習したことを生かして、「地域をよくするために自分たちにできること」を考える視点をもたせ、地域の特徴を考えさせる。 ☆「本区の外国人の割合」の資料からグループで自分の考えを伝え合わせる。(ウ) ☆他教科との関連を意識して、見通しをもてるようにする。(ア)	思(1)
	情報収集⑥	□外国人の文化や生活について調べ、日本との違いについて考える。② □外国人が増えている現状や理由について調べる。② □区役所の方から話を聞き、外国人の現状や問題点を知る。②	○本区に住む外国人は本当に住みやすいと感じているのか、という視点を確認する。 ☆多様な情報収集方法一覧表を参考にし、適切な方法で情報を集める。(イ) ☆学級内で調べたことを伝え合う。(ウ) ○「多文化共生プラザ」の方と関わる機会をもち、働く人の思いや働きを知る。	知(1) 知(2) 知(3) 思(2) 主(2)
	整理分析④	□調べたり、話を聞いたりしたことを整理・分析する。② □本区の国際化に関する現状と問題についてまとめる。②	○相手意識、目的意識をもって、集めた情報をまとめられるよう、比較するなどの「考える技法」を活用する。 ☆表現へ向けて適切なまとめ方を考える。(ウ)	知(2) 思(3)
	まとめ表現③	□調べたことを発表する。② □活動を振り返り、設定した課題についてどのように解決していくか、見通しをもつ。①	○目的に合った発表方法を選択させ、発表の場を設定する。 ☆学校や地域に向けて調べたことを発表する機会をもつ。(ウ)	知(3) 思(4) 主(2)
二次　多文化共生のためにできることを実行しよう⑳	課題設定②	□設定した課題から自分たちにできることを考える。① □ゴールイメージをもち、活動計画を立てる。①	○昔から地域に住んでいる人は、外国人が増えたことに対してどのように感じているのかを考えられるような活動を行う。 ☆課題の達成目標をもつときに、他教科との関連を意識できるよう「生かシート」を作成する。(ア)	思(1) 主(2)
	情報収集⑩	□実際に住む人にインタビューして、情報を集める。④ □区役所の方が行っている仕事について話を聞く。④ □東京国際センターの留学生と関わり、話を聞く。②	○町内会の方や自分の家族などインタビューの対象を身近なものとする。 ○区役所の方と継続して関わることで、その思いを自分事として捉えられるようにする。 ☆多様な方法で情報を集める。特にインタビューを重視し、地域の人や区役所の方の思いを知る。(イ)	知(1) 知(2) 知(3) 思(2)
	整理分析③	□集めた情報から、自分たちにできることを考え、整理・分析する。③	○目的意識や相手意識をもって活動に取り組めるよう、行う活動の「価値」や「効果」、「意味」などの視点を確認する。 ☆「考える技法」を活用し、児童の思考を整理する。(ウ)	思(3) 主(1) 主(2)

	まとめ表現⑤	□考えた活動を実行する。④ □活動を振り返る。①	○児童が達成感を味わって活動に取り組めるよう、保護者や地域、区役所の方など様々な人との関わりをもてる機会を設定する。 ☆地域へ向けて発信する機会をもち、相手意識をもって発表ができるようにする。(ｳ) ☆これまで活用した他教科の既習内容を振り返り、「生かシート」に加える。(ｱ)	思(4) 主(2)

カ　本時について（1/35 時間）

(ｱ)　本時の目標

本区の外国人人口の割合を知り、自分たちの地域の特色についての話合いを通して、国際理解に関する課題意識をもつことができる。

(ｲ)　本時の構成

	□主な学習活動 ・予想される児童の発言	○教員の支援 ☆主題に迫るための手だて((ｱ)、(ｲ)、(ｳ)) ◆評価規準
導入（10分）	□自分たちの区の特徴について知る。 ・外国人はどのくらいいるのだろう。 ・思ったより多いな。どうして多いのかな。	○課題意識をもたせるために、外国人人口が多いことを知ることができるように様々な資料を用意し、提示する。
	区内に住む外国人が増えている理由や現状について考えよう。	
展開（30分）	□グループごとに本区に住む外国人が増えている理由について、考えを出し合う。 ・外国人にとって住みやすいのかな。 ・住みやすいから集まってきているのかな。 ・どうしてこの区に住もうと思ったのか聞いてみたいな。 □外国人が増えている現状について、良い点と問題点を考える。 ・人が増えるのはいいことではないかな。 ・言葉が通じず、困ることがありそう。 □単元の見通しをもつ。 ・どうして日本に来たのか直接聞いてみたいな。 ・それぞれの国の違いや文化がどう違うのか調べてみたいな。	☆個別の考えをグループの話合いの中で整理されるようホワイトボードを活用する。(ｳ) ○自分たちが予想した考えは正しいのか、本当はどうなのか問い掛ける。 ○児童がどのような点に疑問をもつのかを確かめながら、児童の発言や様子から、話し合う内容を決めていく。 ☆本区の外国人について情報を集める際は、情報収集方法一覧表を配布し、そこから効果的な方法を考えられるようにする。(ｲ) ◆本区の国際化に関する現状や問題について、課題を見いだしている。 思・判・表(1)（発言・行動観察）
終末（5分）	□本時の学習をまとめ、次時の見通しをもつ。 ・まず、近くにいる外国人に聞いてみよう。 ・お父さんに話を聞いてみたいな。 □各自の振り返りをする。	○単元の課題を見付けるためにどんな活動から始めるのか、考えられるよう問い掛ける。 ☆毎時間、各自が振り返りを行う時間を確保することで、全ての児童が本時の学びを確かめることができるようにする。(ｳ)

キ　考察

(ｱ)　教科関連シート「生かシート」の作成

学習を進めていく中で、生かシートを作成し、他教科との関連を意識させたことで、他教科での学びを生かしているという自覚をもつ児童が増えたことが、単元後のアンケートにより分かった（図 13）。

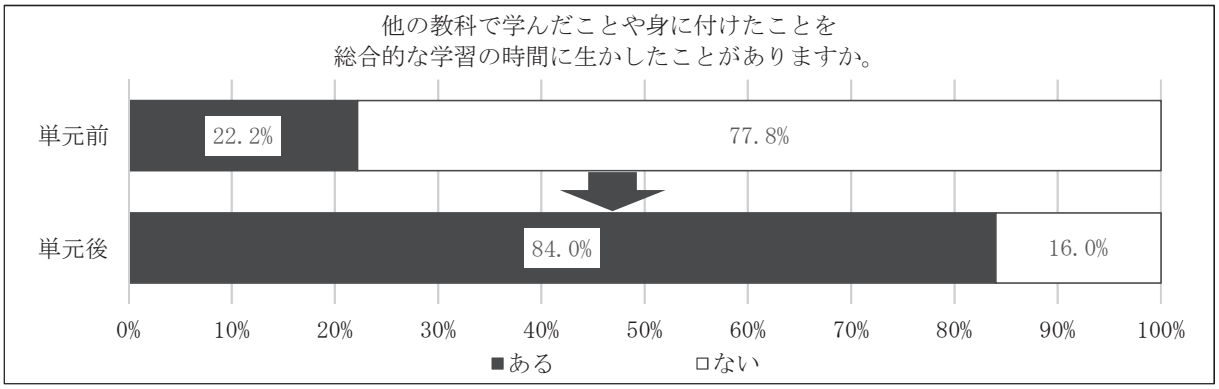


図 13　他教科等の活用の実態に関する調査結果（本学級児童対象）

(ｲ)　情報収集方法一覧表の活用

情報収集方法一覧表を児童が活用することによって、より適切な方法を選択できるようになった。これまでは情報収集の方法がインターネットに偏っていたが、直接話を聞くインタビューや新聞、本を活用するなど選択の幅が広がった。

(ｳ)　「表現場面」を繰り返し設定した単元構成

毎時間の振り返りにより、自己の考えや思いを文章に表すことができるようになった。学習したことをまとめ・表現する場面では、文章、表やグラフなどでまとめる機会を設けたが、単元後のアンケートでは、児童が得意になったという自覚がもてていないことが分かった（図 14）。表現することができても、それらが得意であるという自覚につながることは難しいと考えられる。

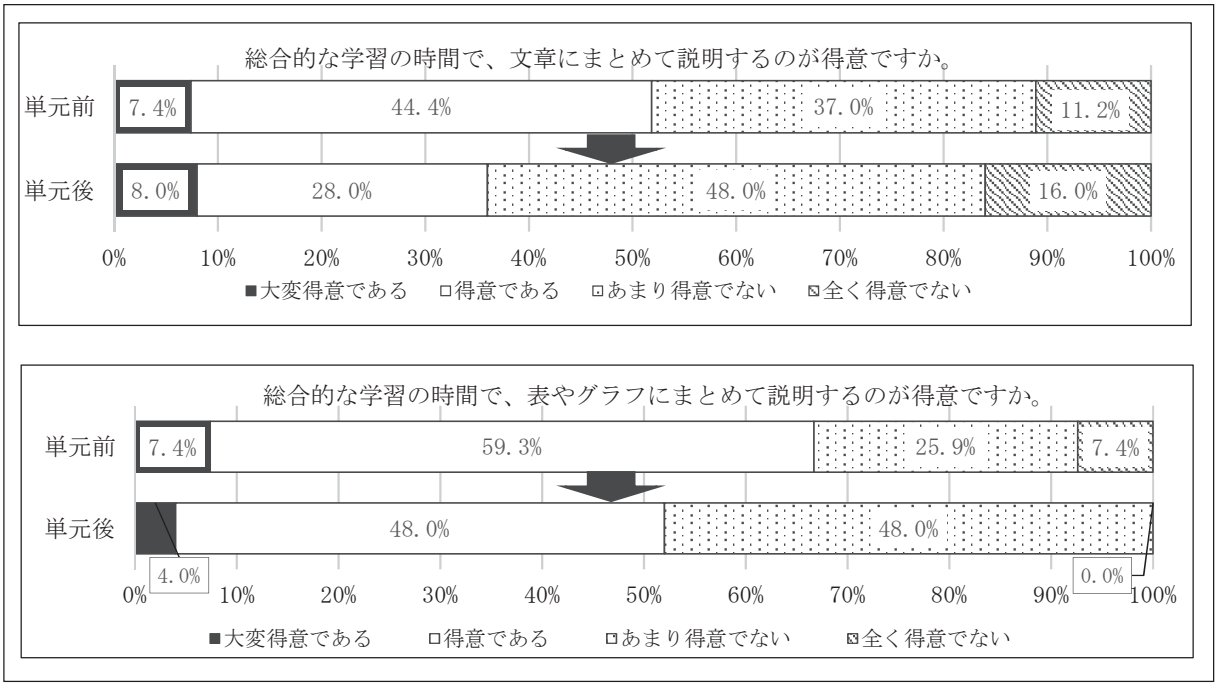


図 14　表現方法の実態に関する調査結果（本校児童対象）

Ⅵ　研究の成果と課題

１　研究の成果

(1)　教科関連シート「生かシート」の作成

総合的な学習の時間において、児童が各教科等の学びを生かすことができるように教科関連シート「生かシート」を作成した。学習を進める中で、児童と共に「生かシート」に各教科等との関連を書き足していくことで、児童が各教科等の学びと総合的な学習の時間との関連を自覚し、総合的な学習の時間に生かすことができるようになった。実践授業を行った４学級全体のアンケート調査結果（図 15）でも、他の教科の学びを総合的な学習の時間の学びに生かすことができたかについて、単元前には 27.4％の児童が生かしたことがあると答えるにとどまったが、単元後には 77.8％の児童が生かしたことがあると答えた。

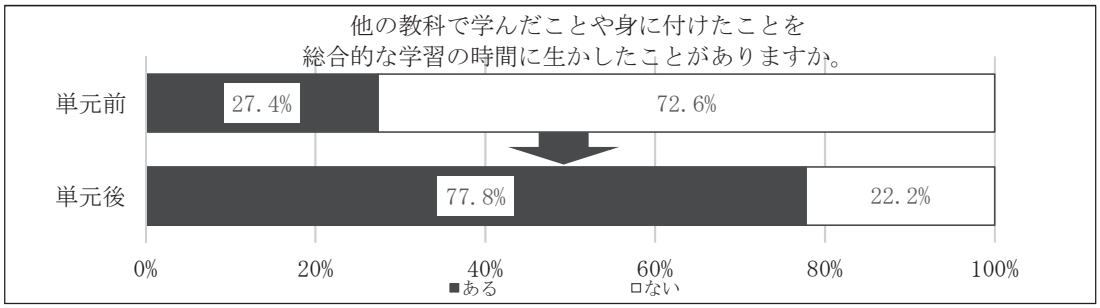


図 15　他教科等の活用の実態に関する調査結果（児童対象）

実践授業では、総合的な学習の時間で生かすことができている他教科等の学びや身に付けたことを児童が付箋に書き出し、学級全体で情報共有を図った。作成した「生かシート」は教室に掲示し、児童が「探究的な学習の過程」の中で現在取り組んでいる学習と各教科等の学習のつながりを意識できるようにした。また、「探究的な学習の過程」が進むごとに振り返る時間を設定し、「生かシート」に総合的な学習の時間で生かした各教科等での学びや身に付けたことを追加することで、各教科等と総合的な学習の時間の学習の関連性を児童が常に意識することができ、各教科等で得た知識や技能の活用につながった。このことから、「生かシート」の手だてが有効であったと言える。

(2)　情報収集方法一覧表の活用

探究課題の解決に適した情報収集の仕方を選択できるように、情報収集の方法を一覧にまとめた。情報収集方法一覧表を活用することで、児童の情報収集の方法の選択の幅が広がった。また、児童がそれぞれの情報収集方法のよさを意識することができ、目的に合った情報収集の方法を選択する様子が見られた。

実践授業では、情報収集の段階で児童が調べたいことを書き出し、調べたい内容に合わせてどの情報収集の方法が適しているかを考える時間を確保したところ、調べたい内容に合った情報収集の方法を情報収集方法一覧表から選択しようとする児童の様子が見られた。児童が目的に合った情報収集の方法を選択することで、より適切な情報を収集することができると考えられる。

(3)　「表現場面」を繰り返し設定した単元構成

実践授業後の４学級全体のアンケート調査結果（図 16）において、52％の児童が文章で説明するのが得意であると答え、58.2％の児童が表やグラフにまとめて説明するのが得意

であると答えた。調べたことを文章、表やグラフにまとめて説明する機会を増やすために、ペアやグループ、学級全体での話合い、他学年や外部への発表などの「表現する場」を繰り返し設定したことで、表現する活動を多く経験することができ、表現することへの苦手意識をもった児童が減ったと考えられる。

実践授業では、「考える技法」を活用して個別やグループの考えを伝え合い、学級の考えとして構築していく話合いを繰り返し行った。また、ゲストティーチャーとの出会いや心が動かされる体験活動の後は、文字にまとめる振り返りを行い、自分の考えを広げたり、新たな気付きを得たりする姿が見られた。

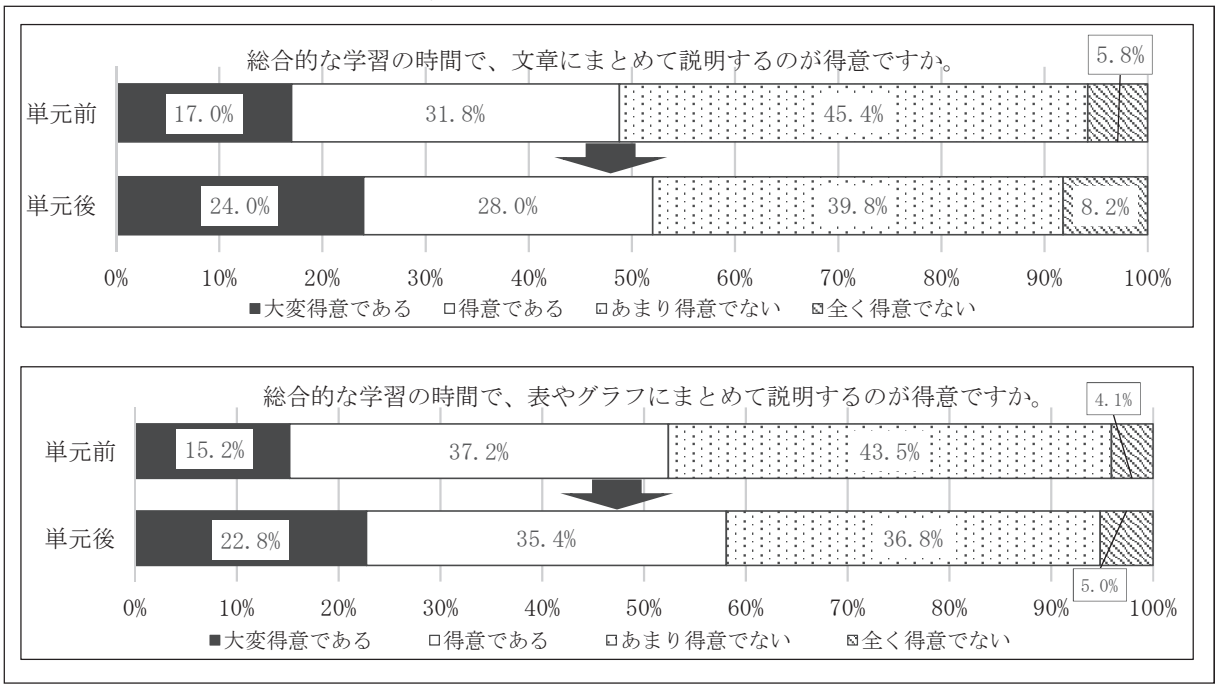


図 16　表現方法の実態に関する調査結果（児童対象）

2　今後の課題

本研究により、総合的な学習の時間の学習に、他の教科等の学習を生かすための手だてである教科関連シート「生かシート」の有効性が確認された。現状は、本研究員の所属校でさえも学校目標と総合的な学習の時間の目標を受けて、探究課題を設定し、育成したい資質・能力と各教科等との関連を全教職員が共通理解をした上で授業を展開することは十分ではない。今後は、総合的な学習の時間の学習の更なる充実を図るために、各学校で定める具体的な資質・能力を全教職員で共通理解を図った上で、教科横断的な視点から整理し、各学年の単元で育成する資質・能力を明確にして授業が行われることが望まれる。

児童が情報収集方法一覧表を活用することで情報収集の選択の幅が広がったが、実際の活用場面でどの収集方法が最適かを選択するには、個別の指導が必要となる。児童に適切な情報収集の方法を選択する力を身に付けさせるための新たな指導法の開発が必要になる。

児童が文章、表やグラフにまとめて説明する力については、実践授業を行った各学校でも結果に差異が見られた。児童にこれらの力を身に付けさせるために、具体的な授業場面を設定し、より有効な手段を検討、開発する必要がある。

これらの課題を解決することで、総合的な学習の時間の学習で育成を目指す資質・能力を明確にし、更なる授業改善が各学校において実現できると考えている。

平成30年度　教育研究員名簿

小学校・総合的な学習の時間

学　校　名	職　名	氏　名
新宿区立柏木小学校	主任教諭	今井貴大
杉並区立杉並第八小学校	主幹教諭	中野富雄
江戸川区立篠崎第二小学校	教　諭	◎北浦明人
江戸川区立第五葛西小学校	教　諭	山之内俊亮
小平市立小平第十小学校	主任教諭	岩井則義

◎　世話人

〔担当〕東京都教職員研修センター企画部企画課
指導主事　山本　佳子

平成 30 年度

教育研究員研究報告書
小学校・総合的な学習の時間

東京都教育委員会印刷物登録
平 成 30 年 度 第 135 号

平成 31 年３月発行

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０―６８４９
印刷会社　康印刷株式会社

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。